

石敢當の比較研究

—中国・沖縄・鹿児島・奄美を中心に—

(論文要約)

東アジアや東南アジアの諸国には、石敢當の姿が見られる。発祥地である中国以外に、日本では石敢當が最も多く見られる。そして、その9割以上が旧薩摩領・沖縄に集中している。筆者は中国・沖縄・鹿児島（と宮崎）・奄美に集中し、石敢當の比較研究を行っている。本論文は序章や終章を除き、9章で構成される。論文の目次は以下の通りである。

第1章 「石敢當」誕生推論（はじめに・『急就篇』にある「石敢當」文言・石造物の石敢當の誕生・現代中国書籍にある石敢當・石敢當誕生推論・終わりに）

第2章 石敢當と泰山石敢當の異同 —中国山東省泰安市岱岳区西南望村を中心に（はじめに・先行研究と調査地概要・西南望村における石敢當の現状および問題点の発見・石敢當について・泰山石敢當について・石敢當と泰山石敢當との比較・おわりに）

第3章 中国北方と南方における石敢當の比較研究 —山東省と福建省を例に（はじめに・先行研究と調査地概要・中国北方の石敢當 —山東省を例に・中国南方の石敢當 —福建省を例に・中国南北の石敢當の比較研究・おわりに）

第4章 日本における泰山石敢當の受容（はじめに・日本における泰山石敢當現状・旧薩摩領の泰山石敢當・沖縄の泰山石敢當・中国南北の泰山石敢當・中国と比較してみる日本の泰山石敢當伝来と受容・今帰仁歴史文化センターの泰山石敢當の分析・おわりに）

第5章 「閩人三十六姓」と琉球の石敢當受容（はじめに・琉球の石敢當伝来・「閩人三十六姓」と唐栄・王国時代琉球の石敢當受容・琉球王国の風水展開からみる琉球の石敢當受容・「閩人三十六姓」と琉球の石敢當受容・おわりに）

第6章 物からみる琉球（沖縄）の石敢當受容（はじめに・先行研究・王国時代琉球の石敢當・戦後沖縄の石敢當・外部と比較してみる沖縄における石敢當受容・物からみる各段階琉球（沖縄）の石敢當受容・おわりに）

第7章 薩摩の石敢當の中国伝来の可能性 —倭寇や唐人町を中心に（はじめに・問題提起・倭寇と薩摩の石敢當伝来・九州中の薩摩の唐人町・唐人町と薩摩の石敢當伝来・九州範囲でみる薩摩の石敢當伝来・薩摩の石敢當伝来の分析・終わりに）

第8章 物からみる旧薩摩領の石敢當受容（はじめに・先行研究・薩摩の石敢當・大隅の石敢當・日向の石敢當・外部と比較してみる旧薩摩領の石敢當受容・歴史と地域と合わせてみる旧薩摩領の石敢當受容・おわりに）

第9章 奄美諸島の石敢當受容 —喜界島・奄美大島・徳之島を中心として（はじめに・先行研究と調査地概要・喜界島・奄美大島、徳之島の石敢當現状・奄美諸島の石敢當伝来論・物の比較を通じてみる奄美諸島の石敢當受容・歴史と合わせてみる奄美諸島の石敢當受容・おわりに）

第1章は、紀元前40年頃にできた『急就篇』にある「石敢當」文字がどのような条件が備え、唐代中後期に石敢當石造物になったのかの推論である。結論として、『急就篇』にある「石敢當」文字は史游が創造した人名の説明で、石敢當石造物の誕生と直接的な関係がうかがえない。「石敢當」文字が呪力を生じ、石造物になったことには、唐代の学者

顔師古の『急就篇注』による「石敢當」の意味付けの普及はその要点であった。

第2章では石敢當と泰山石敢當を分けて資料を収集し、現存する最古のものも参考にし、その異同分析を論じている。結論として、泰山石敢當は石敢當の一種であるが、石敢當と泰山石敢當は同じではない。泰山石敢當には泰山信仰の影響が極めて大きい。

第3章は第2章の補充研究として、石敢當発祥地である福建省や、泰山石敢當発祥地である山東省泰山地域における現地調査を通じて、中国北方と南方における石敢當の比較研究を行っている。調査した結果、中国北方の石敢當はほとんど泰山石敢當であり、泰山地域の属性が強い。一方、中国南方では石敢當と泰山石敢當が同時に存在するが、通常は見られない。石敢當を知っている人もほとんど見られなかった。泰山石敢當と混同する状況も目立っている。

第4章は泰山石敢當に注目し、日本における泰山石敢當の受容を論じている。総じて、日本における泰山石敢當の受容度が低く、旧薩摩領・沖縄にしか受容されていないと言える。その受容には風水師より、むしろ、ノロなどの占い者や中国からの冊封使団の影響が感じられる。そして、その泰山石敢當受容には、各自のスタイルが見える。旧薩摩領には四角柱の泰山石敢當があり、沖縄には自然石及び梵字が刻まれた泰山石敢當も若干ある。

第5章は「閩人三十六姓」と琉球の石敢當受容との関係についての試論である。具体的には「閩人三十六姓」の繁栄や衰退と、石敢當の伝来や普及と比較研究を行った。結果として、琉球の石敢當受容には、「閩人三十六姓」の子孫が大きな影響があった。しかし、それは琉球における石敢當普及の決定的な要素ではなかった。琉球王府の「新唐栄人」、特に風水師の重視と重用が主たる要因であった。

第6章では、琉球王国時代から敗戦、米軍占領期や日本復帰以来にできた石敢當を比較し、各段階における石敢當受容の状況を論じている。王国時代の石敢當普及には、王府派遣の風水師が大きな役割を果たした。戦後の一時期は風水師に替わり、ユタ・カムカカリヤー・ムヌチリ・三世相などのユタ的職能者の影響が大きかった。日本返還以降、セールスマンの訪問販売によって、石敢當設置の風潮が盛り上げられた。最近の沖縄では、風水師やユタ的職能者の指導を受けなくても、個人が積極的に石敢當を購入しあちこちに設置するようになった。

従来の研究では、薩摩の石敢當は琉球侵攻の後に、琉球王国から伝わってきたものだと考えられている。第7章では、筆者が南九州における倭寇活動や、薩摩にできた唐人町に着目し、薩摩の石敢當の中国伝来の可能性を検討している。結論として、薩摩の古い石敢當は、大体その時期の唐人活動地区に分布している。薩摩の唐人町ができたのは、戦国時代から江戸初期の頃である。つまり、琉球侵攻の前に、石敢當は既に渡来した唐人によって、薩摩に伝わったと考えられる。

第8章では旧薩摩領にある石敢當受容を、物から検討している。数量からみると、薩摩藩にできた唐人町や唐人居住地には、他の藩地区より多くの石敢當がある。刻字からみると、薩摩藩の石敢當受容の初期には、仏教関係者が大きな役割を果たした。西南戦争以降の武士の消滅や、戦後に行われた道路整備の影響を受け、石敢當の数は大きく減少した。現在、旧薩摩領にある石敢當の多くは、前代の遺物である。

第9章は奄美諸島にある石敢當を、旧薩摩領、沖縄や中国と比較して、その受容状況を解明する非文字資料の研究である。物の特徴からみると、奄美においては、外部からの石敢當伝来がずっと続けている。遡れば、石敢當は琉球侵攻以前の琉球や中国から、奄美に伝来した可能性がある。薩摩藩に支配されてから、奄美に薩摩風の石敢當が伝わってきた。しかし、琉球からの影響はなかったとはいえない。沖永良部島や与論島の石敢當は、琉球（沖縄）から受けた影響が大きい。これ以外の奄美諸島において、各島は独立的な国のよ

うに、島内や島々間の石敢當受容は地域差が見られる。

こうした中国・鹿児島（と宮崎）・沖縄・奄美などの比較を通じて、その石敢當受容の全体像が次第に見えてきた。つまり、琉球侵攻以前から、薩摩・琉球ともに中国から石敢當が伝来した。東南アジアの諸国と同じく、石敢當は中国から放射線のように海外に伝播した。最初に伝わってきたのは、各地の唐人町や唐人居住地であった。琉球侵攻以降の薩摩には、中国のほか、実質的に支配した琉球からの石敢當伝播も始まった。奄美諸島には、琉球風の石敢當や山川石でできた古い石敢當がともにある。その石敢當はどこから最初に伝わってきたのか。現段階は判定できない。

物の比較を通じて、中国・旧薩摩領・沖縄・奄美における石敢當受容の現状は大きく異なっていることが分かった。類型からみると、旧薩摩領や沖縄にある物は、大部三文字の石敢當である。ただし、旧薩摩領では「石敢當」のほか、「石散當」も多くある。一方、中国においては、圧倒的に五文字の泰山石敢當が多い。特に中国北方にある物は、ほぼ泰山石敢當である。石敢當の分布密度では、中国山東省・沖縄県・喜界島はよく似ており、ともに高い。これに対し、中国福建省・奄美大島・旧薩摩領の大隅や日向地区における石敢當の分布密度が低い。石敢當の分布状況からみると、九州では地域差異が強く感じられる。特に、旧薩摩領以外の宮崎県・熊本県には、現存する石敢當がない。

物の様態からみると、中国北方の泰山石敢當には、「鎮宅」「鎮宅之宝」という文字がよく見られる。しかし、中国南方・旧薩摩領・沖縄では全く見られない。中国南方の石敢當には、八卦・太極図・獅子像・獅子面・虎面などがよく見られる。しかし、旧薩摩領においては、このような符号は全く受容されていない。沖縄においても、獅子像・獅子面だけが受容されているようだ。かわりに、梵字がある石敢當・泰山石敢當や、水字貝などとセットした石敢當が沖縄各地によく見られる。設置場所からみると、中国北方・旧薩摩領においては、高い位置に設置される石敢當・泰山石敢當が多く見られる。これに対し、中国福建省・沖縄の石敢當は、常に低い位置に設置される。

中国から伝わってきた石敢當は、土着する途中に各自の形態が形成された。琉球風の石敢當と言えば、やはり自然石形の物である。現代沖縄社会にできた石敢當に、最も代表的なのは表札型の物である。薩摩風の石敢當は、将棋型（屋頭型）の「石敢當」「石散當」である。奄美独自の物は、九字紋がある石敢當である。

このような石敢當受容の現状には、幾つかの要因があると考えられる。

中国北方における石敢當受容は、道教信仰・泰山信仰・民間信仰・「姜太公在此」など「鎮宅」文化と深く関わっている。一方、中国南方における石敢當受容は、道教風水の影響が強い。文化大革命以降、風水師などの専門知識人の数が大きく減少したため、中国南方に新しくできた石敢當も少なくなった。沖縄の場合、風水師やユタ・カムカカリヤー・ムヌチリ・三世相などのユタ的職能者の影響力の変化によって、各段階における石敢當受容の状況も異なっている。ほかには、琉球固有信仰の影響も感じられる。薩摩に石敢當を伝えたのは、概ね渡来唐人・琉球人などであった。一方、石敢當を薩摩藩領に普及させた主力は、薩摩藩の武士層であった。西南戦争以降、武士階層が消滅したため、石敢當の造立も次第に少なくなった。奄美諸島の地理環境と文化差異によって、島内や島々間の石敢當受容の地域差が見られる。喜界島では、石敢當が昔から盛んだった。現在でも、その造立ブームが続き、奄美諸島のほかの島々とは全く異なる風景になっている。これは喜界島に特有な鬼文化や魔除け伝説などの信仰と関係があるだろう。九字紋がある石敢當は、奄美諸島だけに見られる。奄美諸島が薩摩藩に支配されてから、修験道などの影響を多く受けた。奄美諸島の島民が「九字」を石敢當と融合させ、九字紋がある石敢當をつくったと推測される。奄美諸島の民俗は鹿児島と比べ、沖縄により近い。現代交通が便利になって

から、奄美諸島と沖縄との交流はさらに増えた。奄美諸島にある最近になってできた石敢當は、ほとんど加工用石材の物である。そして、屋頭型（あるいは将棋型）の石敢當より、表札型の「石敢當」の方が遥かに多い。沖縄からの影響は強く感じられる。